

総合問題 (1)

P 20 ~ 21

1 問1 聞かせん

問2 むかい・つがえ

問3 エ

問4 オ

問5 ウ

【解説】『古今著聞集』については4ページを参照。出題文は、「前大和守時賢が墓守、弓の上手を誇示せんとして鹿を取り逃がす事」と題した説話の一部である。

問1 「とては、会話を受ける場合によく出てくるが、ここでは心の中で思った内容をうけている。この前に出てくる「といひて」に惑わされないように注意する。問3 よけいなことを考えたためにせつかく捕らえた鹿を逃がしてしまった、と後悔しているのである。問4 「えき」は漢字で書く「益」であるが、ここでは文脈から判断して、適切なものを選ぶ。問6 文章の結末の部分をしつかり押さえて解答を決める。

〈口語訳〉

ある男が、わなをかけて鹿をとっていたが、ある日大きな鹿がかかった。この男が思うには、「このような大鹿をわなにかけて捕らえたというのでは他人の賞賛は得られないから、弓で射殺したと言って、自分は弓の名人だと人に吹聴しよう。」と思い、わなにかかった鹿に向かって、矢をつがえて射た。その矢は、鹿にあたらずに、わなにむすんだかづらに当たったので、かづらが射切られて、鹿は難なく、走り逃げていってしまった。この男は、頭を掻いて後悔したが、まったく後の祭りであった。

て多くのハマグリを生じ、ついにこの地の名産となった。(土佐の)国の人々は、その時、はじめて兼山の遠い将来までも見通す思慮の深さに感服したのである。

3 問ア

【解説】『お伽草子集』については2ページ参照。出題文は二十四人の親孝行の物語を集めた「二十四孝」の一節で、「孟宗」の物語は落語にも出てくるほどかつてはよく知られた物語であった。

問 孝行息子の祈りに応じて、季節はずれの冬に竹の子を得た、という物語である。現代の感覚ではないが、古文を読む場合、その背景には、現代とは違った思想が存在していたことにも注意を払うことが必要である。

〈口語訳〉

孟宗は、一人の母を養っていた。母が年をとって、日ごろから病みわずらい、食物の味覚も、食事のたびごとに変わったので、求めるすべのないものを母は望んだ。冬のことであるのに、母は竹の子をほしいと思った。そこで孟宗は、竹やぶに行つてさがしたが、雪の深い時節なので、どうしてたやすく得られようか。「ひたすらに、天のおおわれみをお願い申し上げます。」と言って、祈願を込めて、思いのままにならぬのをおおいに悲しみ、竹に寄りかかったところが、にわかには大地が裂けて、竹の子が数多く生え出てきた。

2

問1 ア

問2 さいわいに

問3 ウ

問4 例兼山が、みやげの蛤蜊を全部海の中に投げ込ませたから。(26字)

問5 エ

【解説】『先哲叢談』には、前編・後編・続編・年表があり、計二一六名の伝記を載せた伝記集で、続編が出たのは明治十六年のことである。この出題文は前編に載せられている。『先哲叢談』前編は、江戸時代、文化十三年(一八一六年)刊で著者は原念斎(一七七四~一八二〇)である。

問1 「有らざるなし」の部分に、二重否定である。問3 国の人兼山が土産に持って帰るといふハマグリを早く味わおうと非常に楽しみにしていたのである。問4 兼山がハマグリを一つも残さずに、海の中に投げ入れてしまったので、国の人々は、それをいぶかったのである。問5 「兼山笑つてはいはく」以下の部分に注目し、正しく内容を読み取る。

〈口語訳〉

野中兼山は、土佐(現在の高知県)の国の人である。かつて江戸に来て、帰る時に、手紙を(土佐の)国の人に出しているには、「土佐にはどんな物でもある。江戸から持って帰ろうと思うのは、ただ船一そう分のハマグリだけである。幸い無事に航海を終えて帰郷したら、すぐにこれを贈ろう。」というのであった。(土佐の)国の人々は思った、その珍味を賞味しよう、と。(兼山の帰る)その日を指折り数えて待っていた。(兼山は)いよいよ到着すると、すぐに命じて、船で運んできたハマグリを城下の海中に投げ入れさせ、一つも残さない。(土佐の)国の人々は不審に思つて、(そのことを)たずねた。すると兼山が笑つて言うには、「このハマグリはただみなさんに贈るだけではないのです、みなさんの子孫にも飽きるほど食べてもらいたいです。」と。この後、はたし

総合問題 (2)

P 22 ~ 23

1 問1 例すべての

問2 イ

問3 ウ

問4 けれ

問5 イ

問6 月ばかり面白きものはあらず・露こそあはれなれ (順不同可)

問7 折にふれば、何かはあはれならざらん。

【解説】『徒然草』については10ページを参照。出題文は、第二十一段の冒頭前半部分である。末尾の一文「折にふれば、何かはあはれならざらん。」の部分をしつかりと味わいたい。

問1 「よろづ」は漢字で書けば「万」になる。漢字で考えると、意味がとりやすい場合も多いことを記憶しておこう。問2 主語を示す、すなわち「主格」の「の」を選ぶ。アとウは連体修飾格の「の」であり、エは同格の「の」である。くわしくは本冊48ページを参照のこと。問3 「あはれなり」は重要古語の一つである。ア〜カはいずれも「あはれなり」の意味として、古語辞典に記載されているものである。前後の文脈から判断して、適切なものを選ぶ。問4 「係り結び」に関する問題である。すぐ上に「こそ」があるから、已然形の結びになる。問5 反語と否定が含まれていることに注意する。問6 会話を受ける「と」を見逃さないこと。問7 筆者の考えは、末尾の一文に示されている。

〈口語訳〉

世間のいろいろの雑事は、とくに、月を眺めることによつてなぐさめられるものだが、しかし、ある人が、「月ほど感興のあるものはあるまい。」と言つたところ、もう一人が、「それより露の方が一層興趣があるものだ。」と言ひ争つたのは、おもしろいことであつた。よい時機に